

県内所在の和鏡について

知念 勇

(沖縄県立博物館)

On the Japanese Style Bronze Mirrors Collected from
Age-old Tombs in Okinawa

Isamu CHINEN

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

近年、沖縄県内で古墓から副葬品として和鏡（銅鏡）の発見が相次いでいる。私は、数年前から、これらの和鏡に注目し県立博物館に持ち込まれた数点の和鏡の拓本を採集してあった。平成3年になって、北谷町とその他の地域から和鏡（柄鏡）が発見されたので、これまでに確認されている県内の和鏡の一覧表とその出所や由来などをまとめることにした。今回この和鏡についてまとめることを決意したのは、平成3年2月以後のことであり、博物館紀要に掲載するには、時間的な制約があったが、一応29点を掲載する事が出来た。その分布も沖縄本島南部中部が最も多く、北部にも及ぶことがわかり、さらに宮古・八重山地域まで及ぶことがわかった。時間をかければその他の地域にも分布する可能性があると思われるのでこれを契機に、今後も和鏡に関する情報を収集したいと考えている。

今回の報告をまとめるにあたり、島袋良徳、金城 善、湖城 清、玉木順彦、仲地和雄、内原節子、砂川玄正、与那嶺 豊の方々のご協力を賜りました。厚く御礼を申し上げます。敬称は略しました。今後とも和鏡についての情報がありましたらお寄せ下さい。

1. 県内所在の和鏡

一覧表に示したとおり、今回は29点の和鏡について紹介する。

ここに紹介したもの以外にも、県下には次のような和鏡があることが確認された。

①沖縄県立博物館の所蔵する和鏡は20点余りあるが、今回紹介したのは、博物館に収納される以前の所有者が明確なもの7点に限った。

②これらの他に、沖縄県立博物館には大嶺薫氏のコレクションとして寄贈された和鏡が30点ほどある。これらは本来の所有者が不明であるばかりでなく、大嶺氏がコレクターとして本土からも多く収集されているので、今回の県内に在住する和鏡の中に含めるのは適切でないと考えて除外することにした。

②那覇市首里の平安病院の近くの墓の厨子内にも和鏡のあることが、確認されているがこれは墓に戻されたようである（宮里朝光氏談）。

②勝連町浜比嘉の字比嘉には、アマミキヨを祭った祠が海岸近くにあり、その祠に和鏡が祭られていたが数年前に盗難にあった。たま、字比嘉の旧家の墓から小形の柄鏡を発見し所有者に渡した（発見者・當真嗣一氏）。

⑤首里地域にはかなりの数の柄鏡があったと考えられる（真栄平房敬氏談）。

⑥首里城南殿跡からも「藤原」銘のある柄鏡が出土している。

今回は時間的な余裕がなく、先島地域は石垣市立八重山博物館と平良市総合博物館の収蔵品に限った。石垣市ではハンナの主の墓からも鏡が出土したといわれるが実物は確認出来なかった。宮古においても鏡を所有している人がいるという情報が獲られたが、実物は確認できなかった。以上が約1月半の調査期間に、私が得た情報である。

2. 県内在住の和鏡の特徴

今回一覽で紹介した29点のうち6点は副葬品として、墓内の厨子内から発見されたものである。その状況からみると和鏡は副葬品としてかなり浸透していたことがわかる。

これらの和鏡で所有者が最も多いのは、地頭代家または、ノロ殿内などの旧家が多い。またこれらの和鏡がそれぞれの旧家の家宝として代々伝世している例も多いようである。（博物館に収蔵されている資料には伝世品が多いと考えられる）

県内所在の和鏡は、江戸中期を期を遡るものではなく、最も多いのは江戸時代後期のものである。これらの鏡には中央で作られたものだけでなく、地方で作られたものも多いことが、造りなどによって分かる。

特に興味があるのは、玉陵内の尚賢王妃（花園）（1630～1666）の厨子から発見された和鏡である。尚賢王妃の没年は1666年であるので当時沖縄で使用された和鏡として使用年代がわかる貴重な資料であるが報告書では詳しい内容はわからない。

真栄平房敬氏（首里在）によると、同氏の祖母が明治時代に使用したのは、錫製の手鏡で、明治43年に嫁に来た母の代からは、ガラス製の鏡に変わったと言われる。

県内に所在する和鏡を収集して判明したことは、首里地域にはかなり和鏡を所有する人口が多かったことがわかり、地方においては、地頭代かノロ殿地などに限られていること

がわかった。その歴史的背景などは次回以降に検討を加えることにし、今回は資料紹介にとどめた。

県内に所在する和鏡について紹介したが、瞥見するかぎり和鏡についてまとまった報告はない。これからも継続して資料収集し、今回末報告の分も含めて2回目の報告をしたいと考えている。多くの方々のご協力をお願いしたい。

参考までに和鏡についての概要を中野正樹編「和鏡」『日本の美術10・11』から以下にまとめてみた。

3. 和鏡について

①鏡の形式と移入

鏡は外形によって、それぞれ、円鏡・花鏡・方鏡・柄鏡などの名称で呼ばれている。円鏡は外周が正円形の鏡である。花鏡は外周に切り込みをつくり、花卉形をしたもので、方鏡は外形が正方形のものと、長方形のものがある。柄鏡は円鏡に柄をつけて根のところに持送りのあるものである。

わが国に初めて鏡がもたらされたのは、弥生時代の中ごろと考えられている。一世紀ごろの遺跡から多紐細線文鏡が朝鮮半島を経由して輸入されたものが古墳から発見されている。古代では鏡は単なる映像の具ではなく、神の祭りを伝える宝器であった。古墳から発見される鏡は当初は輸入品にたよっていたが、次の段階になると舶載品をまねて国内で鑄造するようになった。

古墳時代の代表的な遺物といえば、剣と曲玉と鏡であるが、古墳時代の終末になると鏡は古墳への副葬品ではなくなり、鏡よりも金製品の装身具に変わって行く。このように鏡の重要性が薄らいでくると鏡の形にも変化が見られるようになり、鈴をつけた鏡が5～6世紀に出現するようになる。

②飛鳥・奈良時代の和鏡

漢式鏡は、古墳時代とともに衰退し、飛鳥・奈良時代には新たに、花やかな文様をつけた唐鏡が仏教文化とともに登場する。

古墳時代から飛鳥・奈良時代への移行は、漢式鏡から唐式鏡へと移行していった。古墳時代の漢式鏡は神と感じられ、死者とのつながりが強かった。遣唐使によってもたらされた唐式鏡は仏教との関わりで用いられるようになった。

平安時代になると「唐鏡」と「鏡」に区別され、唐鏡とは異なる和鏡が出現したことがわかる。平安時代の鑄鏡は『延喜式』に記録がある。唐鏡から和鏡へと移行する時に宋鏡が大きく影響を与えた。平安時代には、鏡は化粧道具として貴族の生活にとけ込んでいった。

県 内 所 在 の 和 鏡 一 覧

No.	名 称	銘（）内は製作年・江戸	直径単位cm	所 有 者
1	松竹梅鶴亀柄鏡	中原摂津守光重（後期）	25.3	仲程真五郎
2	花蝶柄鏡	藤原近次（後期）	10.3	高嶺 功
3	福寿文柄鏡	天下一清水河内守宗	12.0	前原信尚
4	柴垣松樹南天柄鏡	藤原重義（中期）	10.3	嘉陽宗良
5	松竹鶴亀柄鏡	伊賀守	23.9	万 松 院
6	松梅橘家家紋入柄鏡	藤原光政	17.3	大城勝治
7	草花柄鏡	藤原重義（中期）	不明	宮城宇佐
8	「老相」蓬菜柄鏡	天下一木宏村播守 藤原忠重	23.0	県立博物館
9	蓬菜柄鏡	光長作	14.7	県立博物館
10	蓬菜柄鏡	松村因播守 藤原重義	18.1	県立博物館
11	松樹菊花柄鏡	藤原作	19.5	県立博物館
12	巴文柄鏡	□藤原作	15.0	県立博物館
13	山水柄鏡	藤原作	13.6	県立博物館
14	蓬菜柄鏡	藤原光重	17.5	県立博物館
15	草花鳥文柄鏡	藤原光政	18.0	八重山博物館
16	南天に家紋柄鏡	藤原重義（中期）	12.0	八重山博物館
17	鶴に南天柄鏡	藤原作	12.1	八重山博物館
18	松竹梅柄鏡	木羽因播守	10.7	八重山博物館
19	竹柄鏡	天下一出雲守	12.2	玉城ウト蔵
20	竹流水鶴柄鏡	人見相衆 重次	12.0	金城ヨシ蔵
21	南天柄鏡	伊賀村	9.24	翁長朝裁蔵
22	家紋柄鏡	田中伊賀村	7.4	伊礼 昭
23	南天に鶴柄鏡	藤原作	12.2	岡本恵昭寄贈
24	蝶に菊花流水柄鏡	藤原光長	12.2	岡本恵昭寄贈
25	鳥松梅に南天柄鏡	田中伊賀村	12.3	岡本恵昭寄贈
26	松竹梅鶴亀柄鏡	伊賀村	22.0	横田栄雄寄贈
27	柄鏡（下り藤文）		18.5	尚 裕
28	梅花鳥柄鏡	藤原作	8.0	那覇市教委
29	竹梅柄鏡	田中伊賀村	12.0	大石根治

鏡の編年は、中野正樹編「和鏡」『日本の美術10・11』監修 東京国立博物館による。

出所伝来・発見場所	所有者住所	備考(所有者の家系)
中城城付近の民家	宜野湾市大謝名316の4	仲程商事
伝世品(森山家)	北谷町桑江630	旧姓森山(那覇久米村在住)
屋敷内に米軍が持ち込んだ	本部町字石川145	前原家と鏡は無関係
具志川市江洲城入口墓	沖縄市安ゲ田123	
佐久川氏より寄贈	那覇市首里当蔵3の4	佐久川寛貞氏採集
大城家の墓から副葬品	西原町字内間90	大西田場門中の宗家
宮城家墓に副葬される	浦添市安波茶40	陶製の雁首も副葬
親川武(勝連町浜)寄贈	那覇市首里大中町1の1	
森田孟睦(那覇市首里)	那覇市首里大中町1の1	
松崎清氏寄贈	那覇市首里大中町1の1	
宮本祐古(首里)寄贈	那覇市首里大中町1の1	
砂川次郎氏寄贈	那覇市首里大中町1の1	
森田孟睦氏寄贈	那覇市首里大中町1の1	
新城つる氏寄贈	那覇市首里大中町1の1	
牧志宗泰氏寄贈	石垣市登野城4-1	寄贈年1979年12月15日
牧志宗泰氏寄贈	石垣市登野城4-1	
不明	石垣市登野城4-1	
牧志宗泰氏(字大川)寄贈	石垣市登野城4-1	
高嶺里ノロの所蔵品	糸満市西崎2丁目517	大里ノロ
伝世品	糸満市糸満1203の1	地頭代
翁長家の墓から	糸満市西崎町2-90	地頭代
伝世品	北谷町吉原	地頭代
平良姉総合博物館	祥雲寺住職	
平良市総合博物館		
平良市総合博物館		
平良市総合博物館		
尚賢王妃の厨子内から	那覇市真地	玉陵復元修理報告書
首里金城フチサ12号墓	那覇市与儀	
伝世品	与那城村字屋慶名2359	地頭代(4代前)

③鎌倉・室町時代の和鏡

鎌倉時代は、和鏡の確立期である。平安時代は鏡胎が薄く、文様の表出がやわらかものが多いが、鎌倉時代のものになると、形が大きくなり、鏡胎がやや厚く、重量も増した重厚な感じがする。文様は平安時代を踏襲したものが多く、その中でも牡丹蝶鳥鏡と蓬菜鏡が多い。

室町時代の鏡は平安後期に確立された和鏡が行きつまってくる。この時代には技術的には高度化したが、力みがみられ、伝統的なものを踏襲することに終始し、新鮮さに欠けるきらいがある。このような形式だったものから脱皮するために、円鏡に柄をつけた柄鏡が室町時代末期に登場するようになる。これは宋鏡に影響を受けたものである。柄鏡は使用に便利のため、次第に円鏡にとって代わり、江戸時代に入ると完全に和鏡の主流となった。

④桃山・江戸時代の和鏡

桃山・江戸時代になると、「天正十六 天下一青家次」の銘をもつ桐竹鏡が出現する。文様も能衣装の縫箔などにみられるものと共通する華やかなもので、桃山時代の特徴を良く表現している。「天下一」銘は工芸生産者の生産意欲をあおるために、織田信長がはじめた斬新な政策であった。この天下一の称号を受けた青家は京都にあって、明治まで続いた家柄で、とくに禁裏御用鏡可として知られる。この工房でつくられた鏡は、製作法が古式に則って格式が高い。

このような伝統的な円鏡も、室町時代末期にはじまり、次第に流行のきざしをみせる柄鏡におされ、やがて御神鏡か、婚礼調度の鏡箱に納められる特別なものになってしまう。

それにひきかえて、使用に便利な柄鏡は江戸時代に一般庶民の日常生活に広くとけ込み、庶民的な文様が流行するようになる。

柄鏡は円鏡に代わって江戸時代の主流となり、庶民の間でも広く愛用された。室町・桃山時代の柄鏡は、当時の円鏡に持ち送りをつけたものであった。その特徴は径が小さく、9 cm内外が普通で、柄は細長く、鏡面よりも長い。柄の付け根のところに、待ち送りといって、円鏡を支える雲形の台があり、先端に組紐を通すための小さな穴をあけている。

桃山時代になると持ち送りがなくなり、つづいて下端の小孔もなくなる。鏡面の径は大きくなったが、柄はおなじように細長く、長柄の鏡と呼ばれる。この形式は天正・慶長ごろまで行われている。

江戸時代は公許制度であった。ところが天下一の称号公許制もすぐ破られ、個人でかってに用いるようになった。時代が下るようになって「天下一」の称号は鏡につけられた。

江戸時代前期は、元和・寛永以後になると「天下一」のほかに、「天下一中村」とか「天下一但馬」などの銘がみられるようになった。このころの鏡式は、室町期のものに比

べると、径がやや大きくなって、柄は持ち送りがなくなり短くなった。また柄の中程に握りやすいように細くなったものがあらわれる。その形が三味線の揆と似ているので揆柄と呼ばれている。

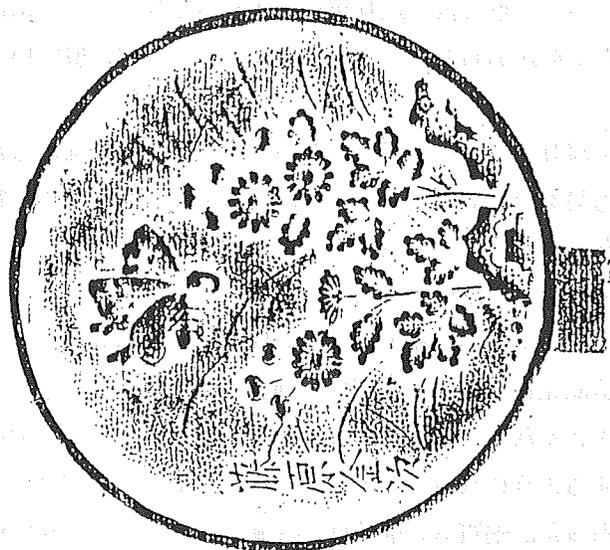
良い下絵を求め、意匠に凝り、技巧を練り、数々の事象を捉えて文様とした。江戸時代前期のものは柄鏡の内でも最も良いものである。江戸時代中期の天和2年諸職人の間に天下一を乱用する者が多くなったので、使用禁止にしたのである。これを境に前期と中期の区別がなされる。天下一のうち天と下の字を消して、上をつけるようになったのは、この直後のことであった。この直後に受領国銘をもらい受け山城や河内守などの領名を表すようになった。名が密とか藤原光重といった性だけを刻むようになったのもこのころである。

中期の鏡は径が総じて大きくなり、柄はやや太く、長さも短くなる。鏡面の広がりによって柄が短いものが流行するようになると、古い長柄の鏡をわざわざ切りつめて、時代のこのみにあわせたものもあった。銅質も、前期は、白銅または青銅の質の良いものが多かったが、この時期になると、品質の低下するものが多くなった。文様も多様であった。南天文はこの時代からはじまった。

江戸時代後期は、柄鏡は一段と大型化した。鏡面は20cm以上あり、柄は極端に太く短く、握ることができないくらいになる。これは江戸時代後期に髪型が大きくなることとの関連が考えられる。このころには、前期や中期の古い形の鏡をうつしとった模造品が登場するようになる。江戸時代後期になると、鏡の需要が増加したので鏡の製法も変化した。

引用文献

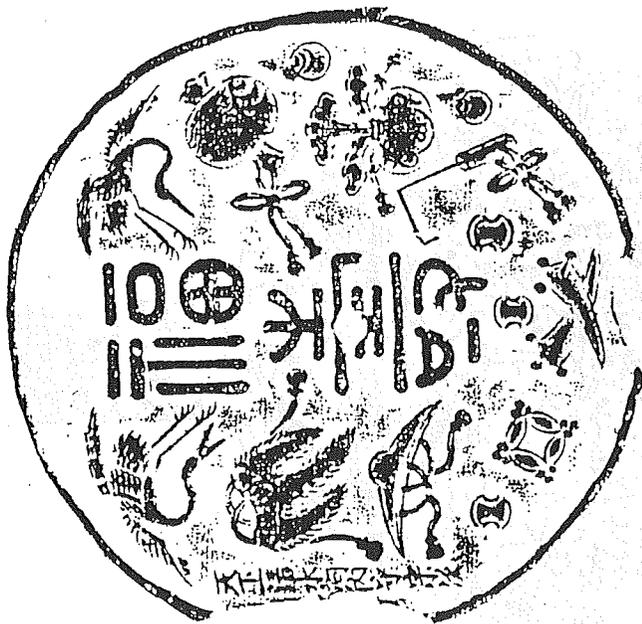
1. 中野正樹編 「和鏡」 『日本の美術10・11』 監修 東京国立博物館 至文堂
昭和44年
2. 「重要文化財 玉陵復原修理報告書」 玉陵復原修理委員会 昭和52年
3. 内間 清 「首里金城町フチサ古墓群発掘調査」 『南島考古だより12号』 沖縄考古学会 1990年



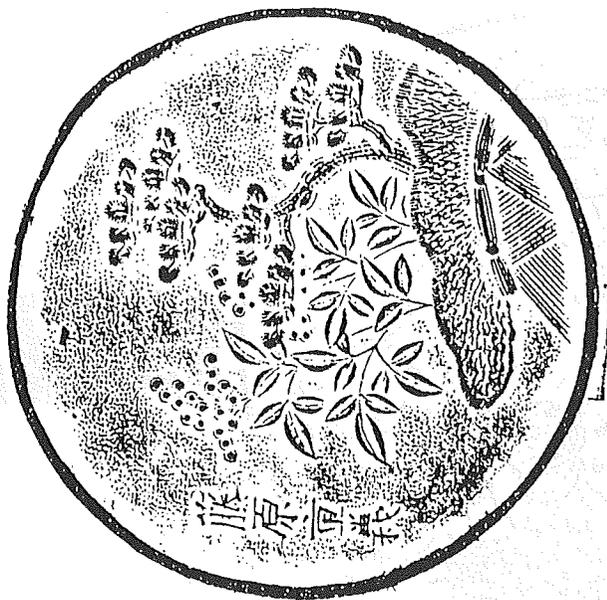
2



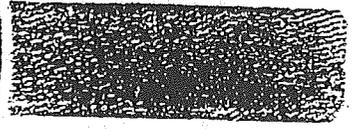
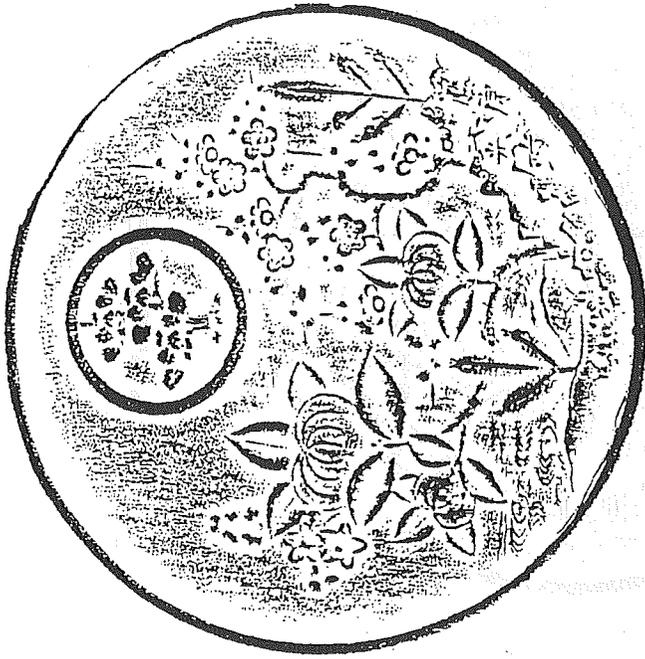
1



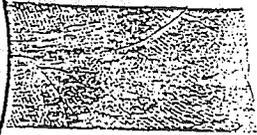
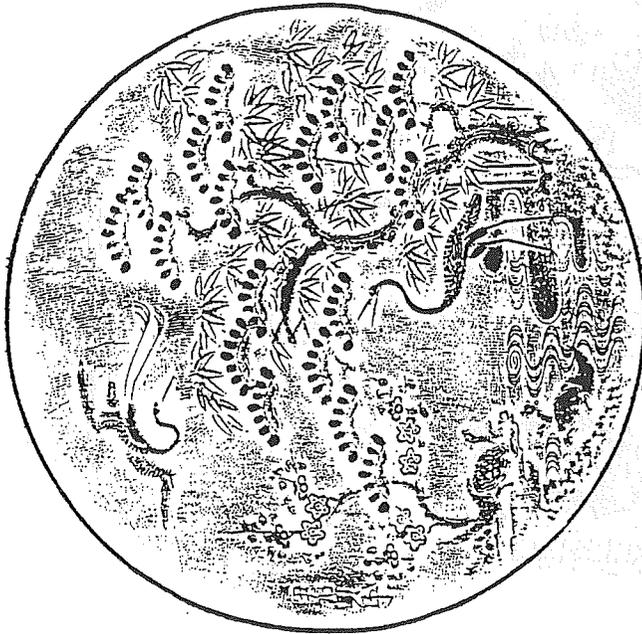
3 0 5cm



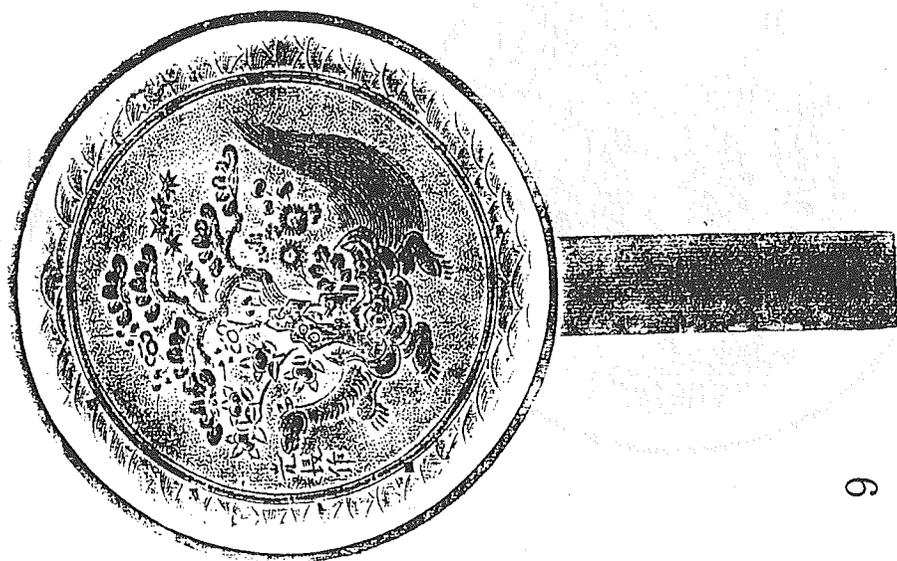
4 0 5cm



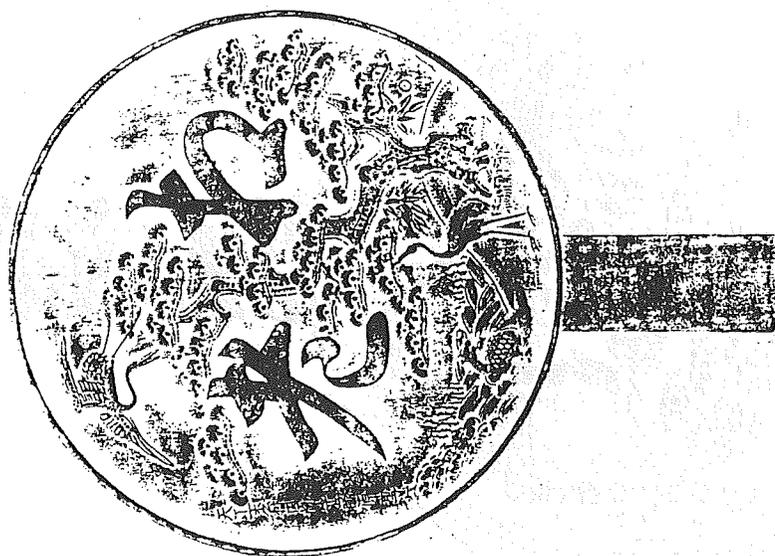
6



5



9



8

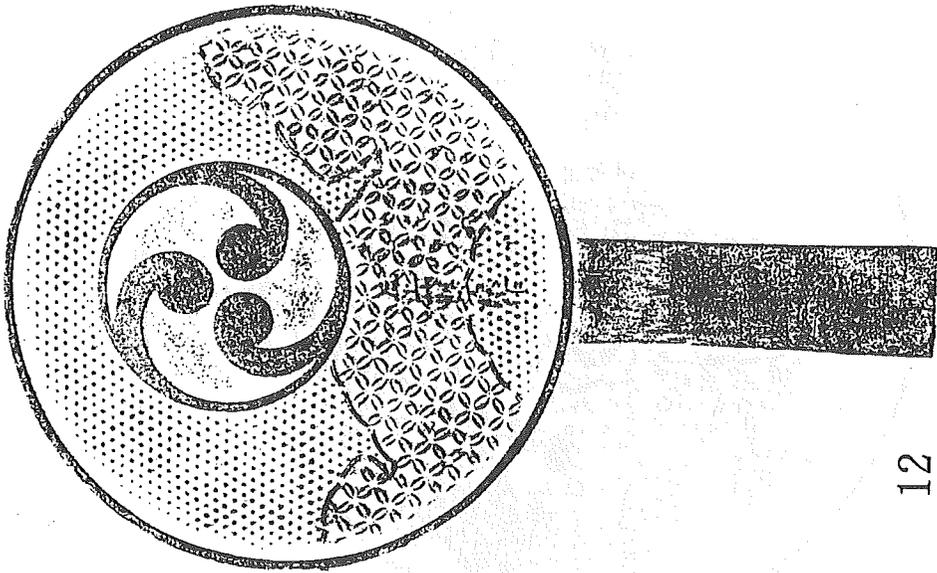




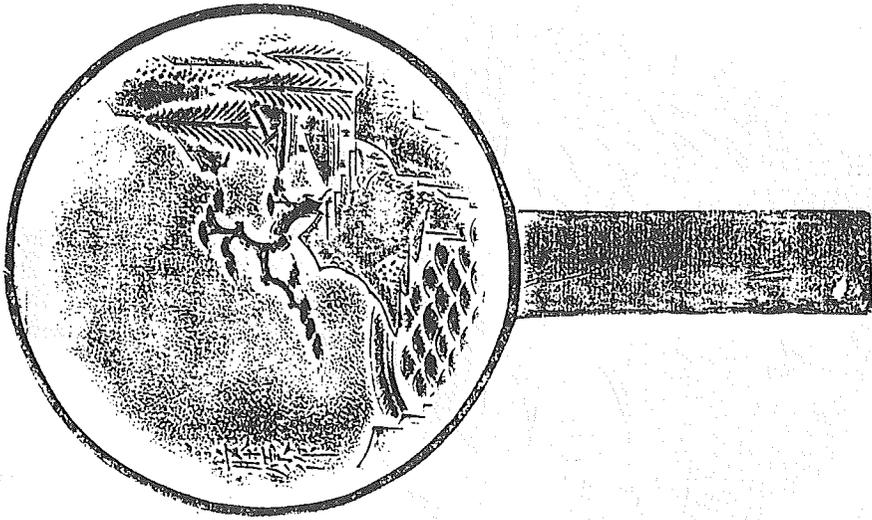
10



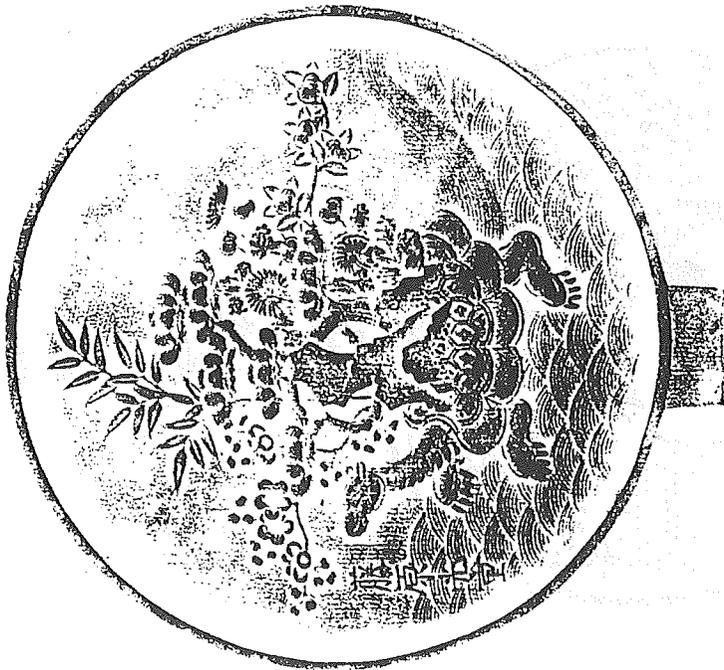
11



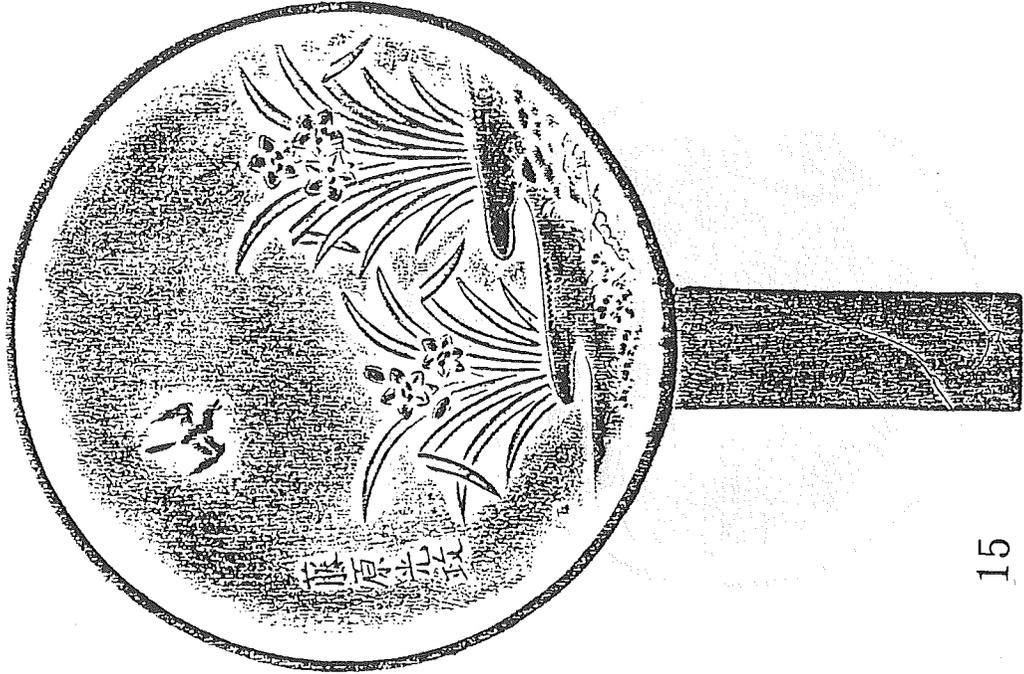
12



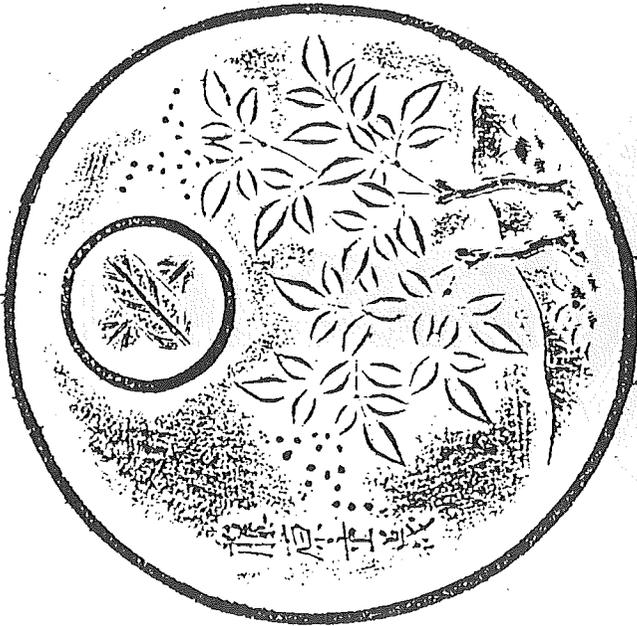
13



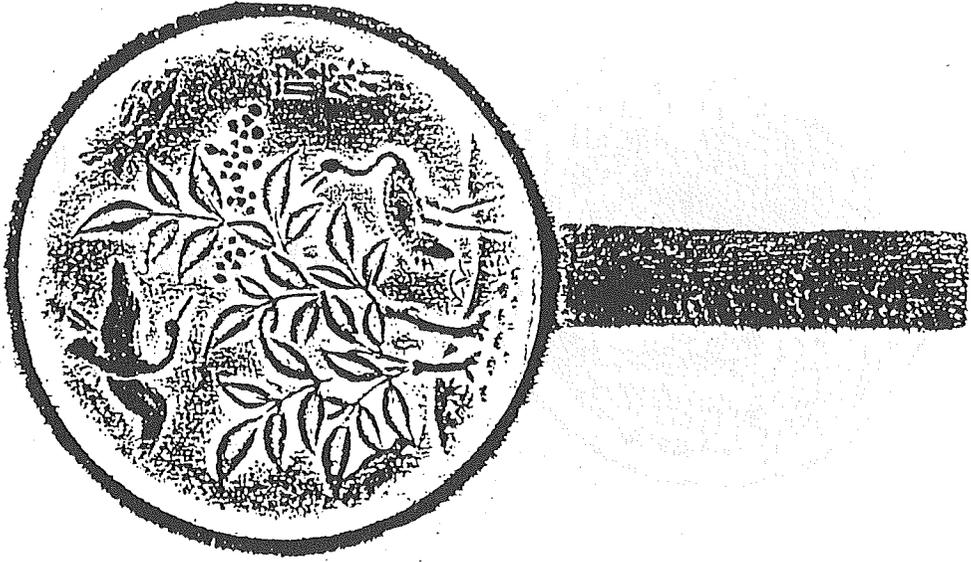
14



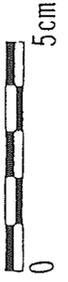
15

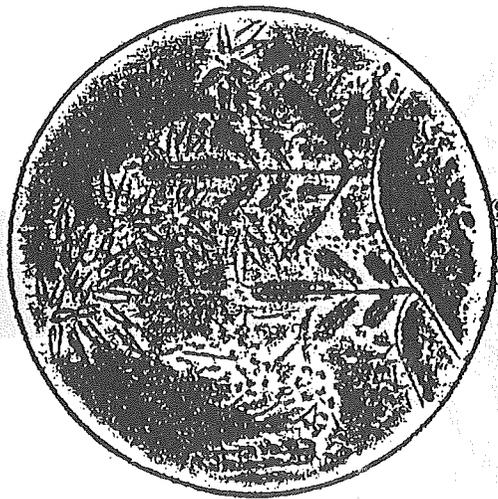


16

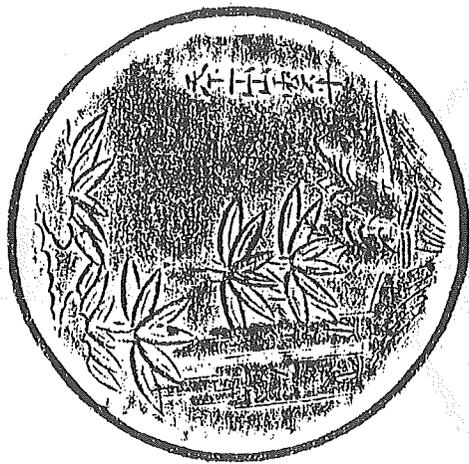


17





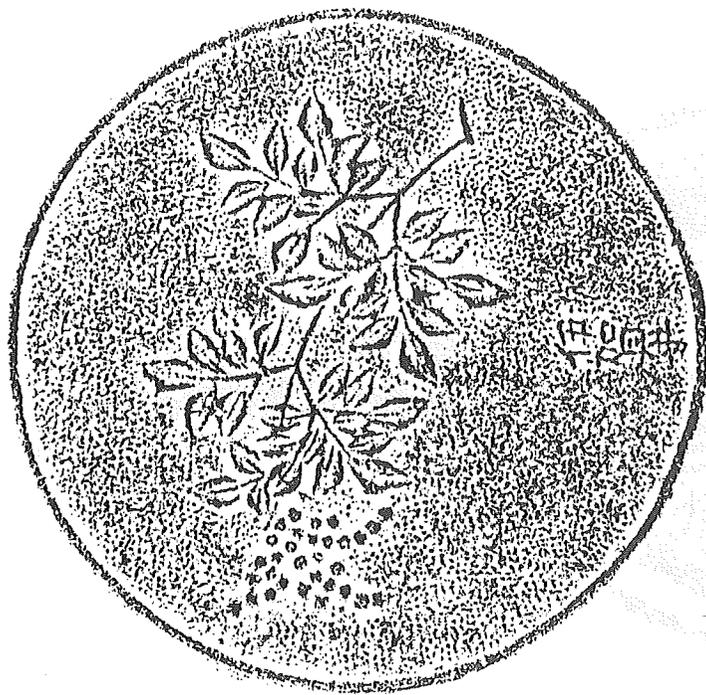
18 0 5cm



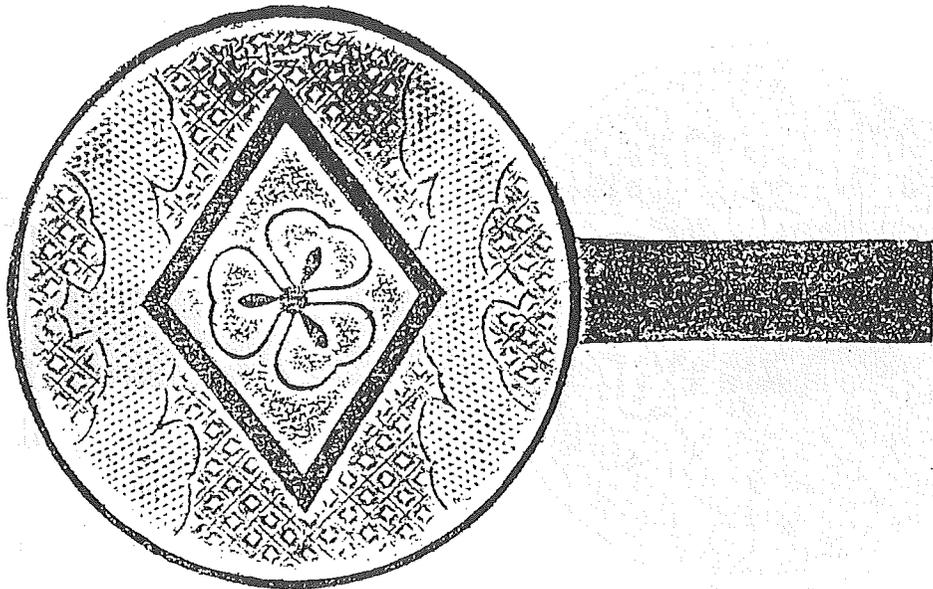
19 0 5cm



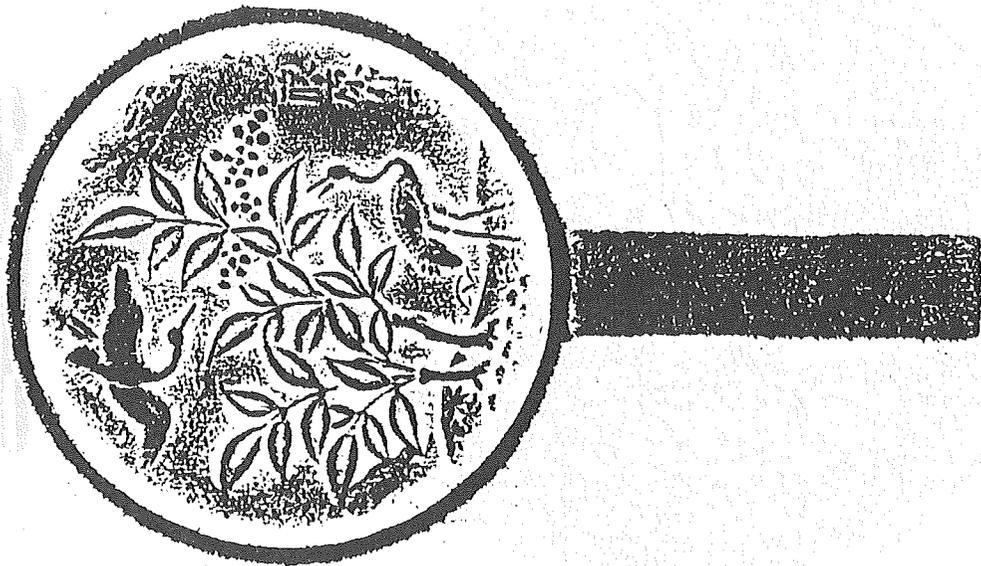
20
0 5cm



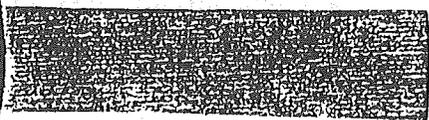
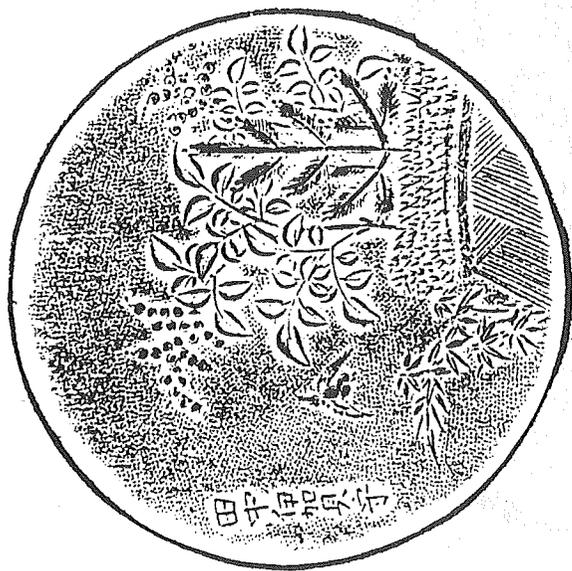
21
0 5cm



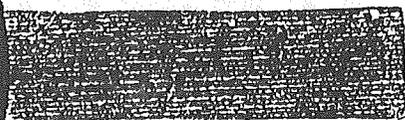
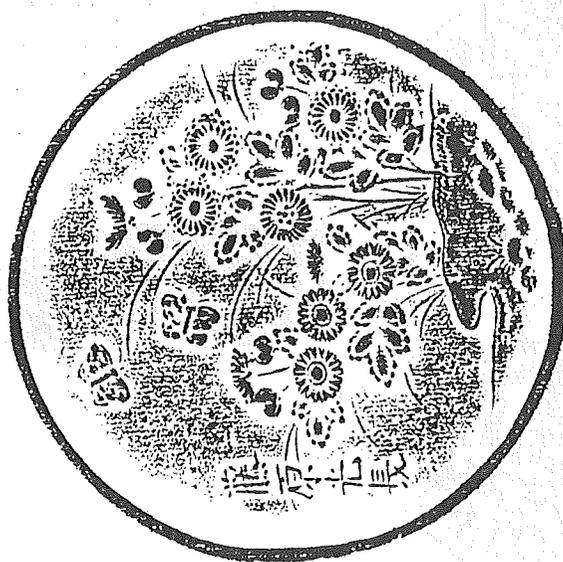
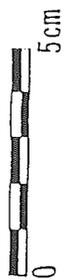
22



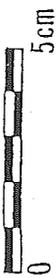
23

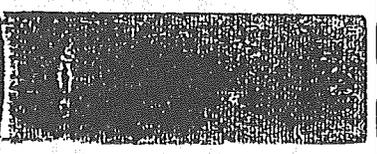


25

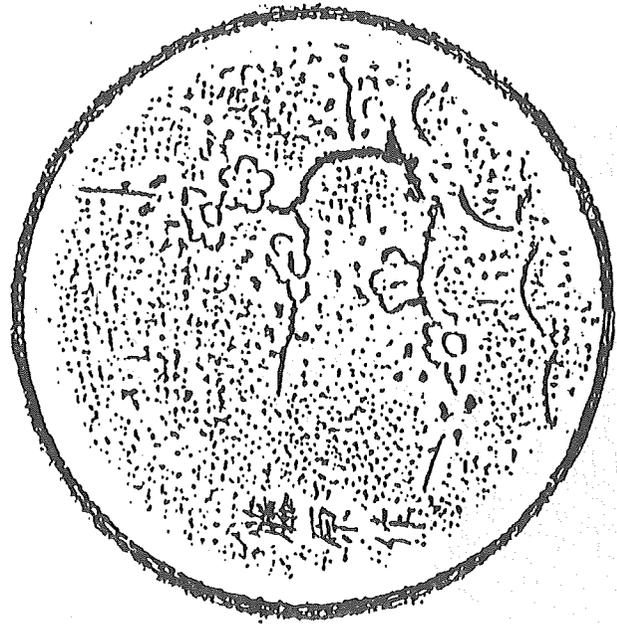


24





26



28